

# 鹿児島県日置市美山所在の嘉永元年銘石碑

渡 辺 芳 郎

## はじめに

近世において「苗代川」と呼ばれた鹿児島県日置市（旧東市来町）美山は、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592-98年）の際に連れてこられた朝鮮陶工によって始められた薩摩焼の窯場で、現在も鹿児島県を代表する窯業地として知られる。

筆者ら鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室では、2006年2月27日～3月1日、3日～5日の6日間、苗代川窯跡群分布調査を実施した。その詳細については、すでに別に報告しているので（渡辺2006b）、ここでは、調査中に実見する機会を得た嘉永元年（1848）銘の石碑について報告したい。ただし後述するように、石碑銘文について不明な点も残る。ご教示たまわれれば幸いです。

## 1 石碑について

本稿で報告する石碑については、鮫島佐太郎『苗代川のくらし』（鮫島1987）に触れられている。同書によれば、石碑は「山舞楽ヶ岡」と呼ばれる「雪ノ山」に所在し、「毎年春秋に苗代川人たちが、往昔より山頂の広場に集まりつどって、故国の祖霊を祀った。はるかに西方のかなた、海と空を眺めて望郷の宴を催し、歌舞終日に及んだ場所である。山頂に左の通りの碑石が建っている」（pp.76-77）とあり、石碑の銘文が掲げられている。

また『東市来町郷土誌』（四元編1988）の「薩摩焼（苗代川）年表」（pp.505-511）の嘉永元年の項に「山舞楽の岡に望郷の碑建立」とあり、「山舞楽ヶ岡」については、野間吉夫『苗代川』（野間1974 pp.35-37）でも触れられている<sup>1)</sup>。

2006年3月5日、十五代沈壽官氏の案内で、筆者と学生4名（有馬由美子・

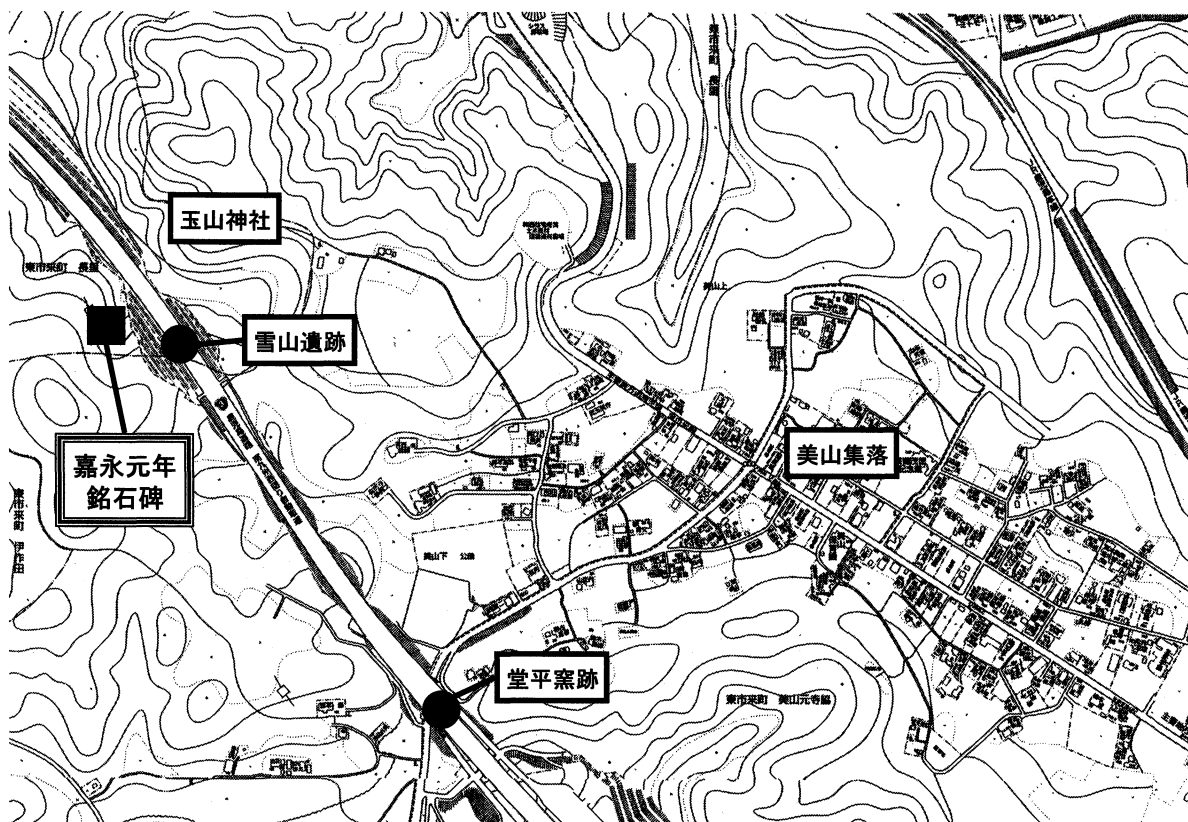


図1 嘉永元年銘石碑位置図

河野裕次・榊原えり子・真邊彩，当時鹿児島大学法文学部3年生）は，本石碑を踏査し，その銘文を確認するとともに，携帯GPS（GARMIN社 Geko 201）で北緯・東経を記録した。

石碑は美山集落の西北，雪山遺跡（宮田・関・三垣編2003）に近い山中に所在し，北緯 $31^{\circ} 38' 41.5''$ ，東経 $130^{\circ} 21' 03.2''$ である（図1）。現在では周囲は山林になっており，海を望むことはできない。

石碑は刀子形を呈し，高さ143cm，下端幅46cm，厚さ17cmをはかる。前面に計70字が刻されている。先述した鮫島1987掲載の銘文と筆者らが確認したものは，若干の異同が認められたので，ここに改めてその全文を掲げたい（図2）。

## 2 石碑銘文について

まず本文であるが，前半の「金龍山浅州寺」「六月堂」は，江戸の「金龍山浅草寺」とその「六角堂」の誤記と思われる<sup>2)</sup>。後半の「今斜陽遥望唐土峻嶺

嘉永元年 戊申 六月十八日 金龍山 浅州寺 為觀世音

六月堂參詣及今斜陽遥望唐土峻嶺為是建牌

相伴人 重久氏 田尻氏 李圓達 金金益

朴龍益 朴權伯

願主

村田甫阿弥經甫



図2 嘉永元年銘石碑と銘文（写真：渡辺撮影）

為是建牌」は、伝来通り、故郷の朝鮮（唐土）を偲ぶ苗代川住民のためにこの碑が建てられたことを示している。

つぎに「願主 村田甫阿弥經甫」とは、薩摩藩の財政再建に奔走した藩家老・調所笑左衛門広郷（1776-1848年）により、苗代川振興のために派遣された村田甫阿弥（吉田1965参照）のことであろう<sup>(3)</sup>。また「相伴人」に出てくる「重久氏」については不明であるが、「田尻氏」とは田尻善斎のことと思われる。彼が、村田甫阿弥とともに苗代川振興のために派遣されたことは、弘化2年（1845）の『御内用萬留一番』（吉田・横井1965a p.78）や同年の『所役日記』（谷川編1972 p.733）などから知られる。また『薩摩焼の研究』において報告されている弘化3年（1846）銘の竈神石塔には、裏面に「寄屋頭 村田甫阿弥」「検者 田尻善斎」とあるという<sup>(4)</sup>（田沢・小山1941 p.184）。両人は19世紀中頃の苗代川振興の中心メンバーであったと考えられる。

一方、苗代川の住民と思われる朝鮮姓の4名のうち、金金益については、明

治18年の『繭糸織物陶漆器共進会 陶器功労者履歴』（『薩陶製菟録』（鹿児島県立図書館蔵）所収，以下『履歴』と略記）<sup>5)</sup>のうち「金泰京」の項に次のように記されている<sup>6)</sup>。

#### 金金益

- 一 天保十四年焼物師見習被仰付候
- 一 嘉永六年焼物師被仰付候

また「朴龍益」については，ほぼ同時代で類似した名前が，やはり『履歴』の「朴龍易」の項に以下のようにある。

#### 八代 朴龍石

- 一 文政十二年焼物師見習被仰付候
- 一 天保八年焼物師被仰付候
- 一 弘化三年小細工主取被仰付候
- 一 安政元年惣主取被仰付候

#### 九代 朴龍易

- 一 安政四年焼物師見習被仰付候
- 一 文久二年焼物師被仰付候
- 一 明治七年焼物所工長被仰付候
- 一 明治十五年第二回内国博覧会に沈壽官出品の龍船に七福神の置物は何三官と兩人にて製造仕候。以来壽官方に捻細工のみ製造仕居候

「朴龍益」が「朴龍易」なのか，「朴龍石」なのか，あるいはまったく別の人物なのかは，現段階では判断できない。また「李圓達」「朴權伯」についても，今のところ不明である。

以上より，不分明な点が多々あるものの，本石碑が，伝えられているように，苗代川住民の望郷の祭礼のために，嘉永元年に建立されたことが再確認できる

